

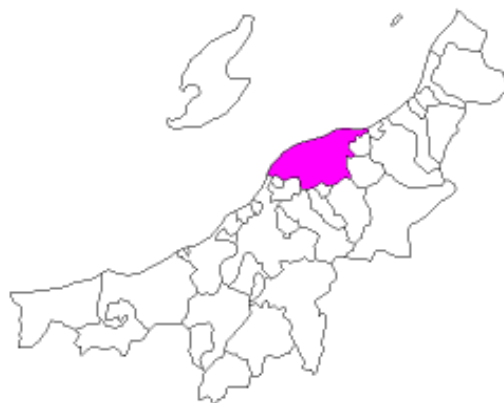
特定非営利活動法人ホームレス支援ネットにいがた

キーワード：まちかど館 就労支援

活動地域：新潟県新潟市

活動地域概要：

新潟市は東京から北西約300km、本州日本海側で最大規模の都市。多くの水辺空間と自然に恵まれ、人口約81万人。古くから港とともに栄え、現在でも水陸両方の交通の要衝である。中心市街地は、信濃川の左岸と右岸を結ぶ萬代橋を中心に広がっていった。団体が活動を展開する下町（しもまち）地区は信濃川の右岸にあたり、港町情緒を感じさせる町並みや、そこに住む人々の信仰を集めた寺社など、港町新潟ならではのたたずまいを今に残している。活動拠点「まちかど館」がある一帯は元遊郭街だったとされるが、「まちかど館」の建物自体が元遊郭であったかどうかは定かではない。



団体・活動概要：

新潟市内において1999年頃からホームレスが目立つようになりました。炊き出しや冬季シェルター等の緊急対応に取り組んできたNPOの一員は、ホームレスから仕事がないかと問われることが多くなり、ホームレスの就労支援とその基礎条件づくりを目的に、2003年、団体を設立することにしました。2004年度には、新潟市と市古町六番町商店街振興組合から、清掃事業を請け負い、ホームレスを雇用して作業を実施しました。また、住宅兼（旧）商店を一棟賃借して、それを一室ごとホームレスに転貸して、彼らがホームレスから脱する居住条件を整えてきました。助成対象活動では、賃借した建物の非住宅部分に団体の事務所を整備するとともに、元ホームレス同士がお茶を飲みながら談話できる場や地元自治会の古紙回収作業の集積場の設置を行いました。作業にあたり、学生ボランティアが地元とのコミュニケーション作りに多大な貢献を果たしました。今後もホームレスの就労支援を軸に、職の提供における職域の拡大、情報教育の実施など、ホームレスが安定した社会生活を送るために必要なことを多角的に支援する予定です。



特定非営利活動法人ホームレス支援ネットにいがた

設立：2003年 メンバー総数：41名

代表者：理事長 佐藤進

連絡担当者：理事・事務局長 寺尾知香子

連絡先：〒951-8067 新潟県新潟市本町通十四番町 3135-3

TEL：025-225-1078

FAX：025-225-1078

E-mail：sien-niigata@sirius.ocn.ne.jp

ホームページ：なし

1 団体の目的と経緯

(1) テーマと目的

ホームレスの自立支援

「ホームレス支援ネットにいがた」(以下「支援ネット」と略す)の目的は、ホームレスが求める就労を実現する活動を中核に、彼らの生活を手助けしてホームレスが援助を受けるだけでなく、社会の中で役割を果たすことができるように支援することにあります。

(2) 地域の状況や課題、この活動を始めたきっかけ、これまでの活動経緯

個人的なボランティアから組織としての支援へ

ホームレスの人から、「働きたい。自分のお金で食べ物を買いたい。」という声を多く聞きました。住所の無い彼らはハローワークで就職探しをしても職に就くことは相当に厳しい状況にあります。支援ネットは社会復帰や自立の意思を持つ人に、就労支援及び就労を実現するための生活援助を行うために設立しました。

「寒い新潟にもホームレスはいるのですか？」と良く問われます。

新潟県内および新潟市内のホームレス者数は、2003年の厚労省による全国調査によると、目視調査で県内74名、市内52名となっています。

新潟市内では、新潟駅を南北に貫く通路に起居する人が1999年頃から目立つようになりました。最初はダンボールを敷いて寝起きしていましたが、2003年頃からダンボールハウスに変わってきました。風が通り抜ける通路ですから、寝るときには少しでも風除け効果が期待されます。

当時、ホームレスの人たちへの食料、衣服、冬場の携帯懐炉や毛布などの提供は、NPO法人新潟NPO越冬友の会(以下、「越冬友の会」と略す)が行っていました。寺尾知香子は、2001年から越冬友の会

でボランティアをしてきましたが、ホームレスの人の多くから、「仕事が無いですか？」という問いかけが多く、就労支援を行うことを考えました。最初は個人的に履歴書・切手・写真代等を提供すると同時に職探しを行いました。例えば、2002年春に、新潟駅通路を宿所にしていた男性が職を見つけました。その際に、寺尾は、新潟市社会福祉協議会からの一時的な資金借入れ手続き、多重債務解決のための弁護士相談、国民年金・健康保険の保険料滞納分の返済や加入手続の援助を行いました。

しかし、自立支援の活動を個人で行うことには厳しい限界があり、賛同者を募ってNPO法人を設立することとし、2003年9月に支援ネットを設立しました。

2004年2月、NPO法人設立記念を行った際に、記念講演をしてくださった中島明子・和洋女子大学教授が、生活の安定のための住居の必要性を強く主張されました。支援ネットの理事長佐藤進(新潟青陵大学学長《当時》)もこの必要性を認識していました。



学生による天井のペンキ塗りの様子

しかし、公営住宅をはじめ民間アパートへ入居するには保証人が必要です。ホームレスの人たちは、



まちかど館の周辺の様子



まちかど館を側面からみたところ

家族と音信を絶った人、家族崩壊した人が多く、保証人確保は難しい状況です。2004年ホームレス自立支援法が施行されホームレス対策が行政によっても講じられることになったのですが、ホームレスの人数が少ない地方都市では、この法律に基づく国の支援は受けられず県、市は対策を講じないままでした。

そこで、支援ネットでは、就労支援の前段階として、求職活動をするために必要な、安定した生活と連絡先を確保するための自立支援アパートを開設することを最初の事業としました

2004年度、リーバイ・ストラウスコミュニティ財団および連合からいただいた助成金を財源に、元住居兼商店の空家を賃借して、改修を行い、個室8・共同の食堂・台所・風呂場・洗面所・トイレを設置しました。支援ネットは、ホームレス状態から脱することを希望する人に「まちかど館」と名付けたこの施設を転貸します。したがって入居者は家賃を支払います。2006年4月末までは8名、現在は7名の入居者がおり、全員生活保護を得て、そこから家賃を支払っています。

「まちかど館」の効果は顕著で、開設後1年強で次の3つの成果が現れました。

- 1) 単発のアルバイトや日雇い仕事に出かける人、ハローワークを通じて「再就職促進等訓練」を受講している人など就労支援の効果がありました。
- 2) 入居してから家族と再会や連絡が取れた人が3人います。
- 3) 1名が今年5月に市営住宅に転居しました。このように、職業生活・家庭生活の両面で、野宿状態から社会生活への復帰が進んでいます。もちろん、家族がすでにいない人のこれからの生活や、金銭管理や生活習慣がきちんとできない人の生活指導など、「まちかど館」開設当時は気づ

かなかった課題も明らかになっています。

一方、野宿生活からでもできる仕事を、支援ネットが自ら実施するのも事業活動のひとつです。古町通6番町商店街振興組合からの清掃を3年継続して受託しています。古町通6番町は、新潟市のもっとも繁華な商店街です。ここで花壇の手入れ、自転車の整理整頓、道路の清掃等を月2回実施しています。また、新潟市から30万円弱の清掃の請負も2年続けて受注しています。

2 活動の内容

(1) 具体的な活動の紹介

今回、H&C財団から助成金をいただいたのは、

- 1) 支援ネットの事務所を整備し、
- 2) その中に元ホームレス同士がお茶を飲みながら談話できる場、ならびに
- 3) 地元自治会の古紙回収作業の集積所を設けるためです。

「まちかど館」の建物は、元々住宅の部分と商店の部分に分かれていました。支援ネットは、それまで事務局長の自宅に置いていた事務所を、その元商店の部分に事務所を移転することを計画しました。

第1の目的は、それまで事務局長の自宅兼用の事務所であったため、電話・ファックス等も支援ネットの専用番号がなかったり、ボランティアの人たちが不定期に集まる場所を確保できなかったことを解消することです。

第2の目的は、ホームレス状態を何とか脱して独立した住宅で暮らすことができるようになった者が、かえって生活が孤独になってしまうケースがしばしば見られたので、こういった人たちが、ボランティアとあるいは彼ら同士で交流することができる場を提供することを目指しました。

第3の目的は、「まちかど館」開設の際に緊張関係



改修前の事務所の様子



学生による測量の様子

にあった地元自治会の活動に貢献し、このアパートと入居者が地域の中で一定の役割を果たすことができるようになることです。入居者が地域に住む住民の一人であることを地元の方々と入居者が互いに理解し合っ、地域に住む住民同士として交流することができれば一番よいのではないかと考えたからです。

具体的には、「まちかど館」のうち、以前は八百屋の店舗として使用されていたセメントの三和土になっている約20㎡を事務室に改修しました。18㎡に床を貼り、事務机2脚、大机1脚を置き、コンピューター2台・プリンター・スキャナー各1台、電話機兼ファックス機、シュレッダーを設置しました。一面には約1.2㎡のトイレを設置しました。事務所前面から側面にかけて奥行き60cmの三和土を残しました。これは、地元の古紙回収の際に古紙置き場に利用できるようにしたためです。また、事務所前面だけでなく側面もガラスの引戸を設けました。

(2)活動の特徴、工夫点、苦労した点

(1)の活動については、計画の内容と計画の進め方の二つの面から工夫をしました。

まず、計画内容では、(1)で述べた3つの目的に対応して行った工夫は、次のとおりです。

第1の事務所機能の拡充については、住宅部分との区分を課題としました。この点については、細かい工夫を幾つか施しました。例えば、賃借した建物にはトイレが住宅内にしかなかったので、スタッフや来訪者が、住宅部分へ入って入居者のプライバ

シーを侵さないように床面積18㎡と言う狭い事務所にあえてトイレを新設しました。また、一方では、ホームレスや元ホームレスの人たちの来所し易さを確保するとともに、他方では来所者が目立たないようにするため、事務所部分の2面にわたってガラス戸を設けて開放的な雰囲気を出すとともに、床を張った部分全体と三和土をカーテンで遮ることができるようにして、事務所の中を見えないように工夫しています。

第2の元ホームレスとボランティア、元ホームレス同士の交流機能の確保については、次のような工夫をしています。入居者の友人が入居者を訪ねて来た場合には、元々住宅部分を整備する際に食堂を広めに作っておき、そこで入居者と友人がお茶を飲みながら話ができるようになっています。今回、事務所部分を整備するに当って、事務専用机は2脚にし、大きな机を1脚置き、そこで事務を執ったり、入居者とは縁のない来訪者も迎えることができるようにしました。

第3の地域活動の場の確保については、次のような工夫をしています。まず、「まちかど館」開設前から、自治会が回収する古紙の集積をこの建物内で受入れることが確定していたので、それはガラス戸を開けた三和土の部分と、建物の前に張り出した軒の下に積上げることができるようにしています。とりわけ軒は、歩道に付けた足が腐っていたため、新たな足を設けて建物前部に雨が当たらないようにしました。

次は、「まちかど館」前に軒下にベンチを置いたことです。この周辺は高齢の住民が多く、「まちかど



軒下のベンチで談笑する住民



学生によるサッシ修理の様子



学生によるトイレ新設の様子

館」開設以来、この建物の前にはかつてベンチが置いてあったとか、買い物の途中などで一息つく場所があると高齢者にはつづがうが良いという地元の声を聞いており、それに応えるために置きました。

計画の進め方について工夫したのは、入居者や地元の大学生に施工に携わってもらうようにしたことです。前述のとおり、「まちかど館」開設にあたって、支援ネットは、地元自治会と長い交渉をし、いちおうの合意には達しましたが、両者の緊張関係あるいは地元からの不信感を実質的には解消し切っていませんでした。そこで、大学生がここに出入りすれば、地元の信頼感と親しみ易さが生まれること、また入居者が工事に加われば、地元の安心感が生まれることを期待して、このような人たちに施工に加わってもらいました。

3 活動の成果

(1) 目的・目標は達成できたか

この工事によって、当初の3つの目的のうち、2つは達成に向かって大きく前進し、1つはあまり前進しませんでした。

まず、事務所処理能力は大いに拡充しました。電話・ファックスは支援ネットの専用回線を開設しましたし、事務機器も当面の活動には充分なほどに整えることができました。事務局長とボランティア事務スタッフの専用事務機の他にも、事務処理や打合せに使える机を置くことができました。おかげで事務所移転後に新たに2名のボランティアが活動に参加して、事務所に通ってくれています。

次に、元ホームレスとボランティア、元ホームレス同士の交流は、期待に反してほとんど行われていません。その理由は、綿密に調査していませんが、思いつくところを述べます。まず、事務所開設が12月で寒さや雪のためにホームレスを脱したばかりの人たちがなかなか外出しづらい季節だったこと。第2

には、ホームレスの人たちは3～5名のグループで生活していることが多いが、「まちかど館」の入居者が生活していたグループの中にホームレスを脱した人がいないこと。第3には、いったんホームレスを脱すると、ホームレスに関係する場所へ足を向けたがらなくなること。

3番めの地元自治会および地元住民とのコミュニケーションは、予想以上の成果が得られています。

この成果を顕著に現したのが、事務所開きに地元自治会からご祝儀を頂戴したことです。これは、入居者の生活態度が周囲の人たちの信用を得たことが最大の理由ですが、学生ボランティアが事務所改修工事へ参加してくれて、工事の合い間に建物の前を通る人たちと話をしてくれたことも、住民の緊張感を和らげる効果を上げました。

「まちかど館」開設時から約束していた古紙回収の集積については、打合せでは新聞紙を回収するはずだったのですが、じっさいに受入れてみると、一升瓶や雑誌、段ボール等々多様な物が持ち込まれました。それでも新聞紙を集めて置く予定だった三和土部分は、ガラス戸に沿って細長いので、障害は生じていませんし、軒を改修したので、その下も利用できます。その結果、自治会役員から「助かります」というお礼の言葉をいただきました。

事務所前面の軒下に置いた、学生が端材で作ったベンチは、往来する人達に利用してもらっています。多くの人が買い物帰りに一息入れたり、おしゃべりの場に利用したりしています。時々ベンチの利用者から「このベンチは(休憩を取るのに)とても助かる。ありがとうございます」と声がかかります。

(2) 地域や団体にどのような変化をもたらしたか

支援ネットと地域との関係は、助成活動に負う点は、前記(1)の3番めに書いたように、地域とのコミュニケーションが予想以上に良い方向に変化し



ベンチ塗りをした後の後始末を入居者に教わる学生



古紙回収集積場の様子

ました。

助成活動以外の活動では、花壇修復が効果を生み出しました。「まちかど館」の建物の脇には2坪ほどの花壇がありますが、10年以上も空家だったため、その花壇は藪のようになっていました。それを、入居者が手入れをし、花を植えたり、大根や人参を植えてミニ菜園にしたりしました。近所の人が花を楽しむに見に来たり、「今度は何を植えたかな？」などと入居者に声をかけてくれるようになりました。

支援ネット内部に対して、助成事業がもたらした影響は、前記(1)の第1で記したとおりです。事務処理が円滑になり、ボランティアや会員が気軽に事務所に顔を出すようになりました。

(3) 活動に必要な資源(人材、資金、情報、ネットワークetc.)をどのように活用し、新たに構築したか

まず人材については、地元の総合大学である、新潟大学の教員・学生の協力を頂く事ができました。

事務所改修における基本的理念は、以下の者が議論して決めました。

新潟大学工学部 岩佐明彦助教授(建築計画 住宅計画)

黒野弘靖助教授(建築計画 住居論)

新潟大学経済学部 澤村明助教授(NPO論)

支援ネット 寺尾知香子事務局長

長谷川正康ボランティア(新潟大学大学院自然科学研究科修了)

次に、具体的な設計・施工は、岩佐助教授が研究室の学部・大学院の学生15名にボランティアで実施させてくれました。その効果は、前記(1)のとおり、地元の方々とのコミュニケーションの改善に役立ったほか、経費を削減することもできました。材料費が予想よりも大幅に高くなりましたが、教員と学生のボランティアが設計・施工してくれたおかげ



共同リビングでパソコン操作をする入居者

で人件費がかからず、その分材料費に回すことができました。さらに、入居者の中に元ペンキ職人がいたので、塗り方のコツや後始末などを彼が学生に教えながら、一緒に作業してもらいました。また、廃材などの後始末は入居者が手伝ってくれました。これは、入居者にとっては社会参加の一つになりました。

資金については、貴財団の助成金のほか、会費および「まちかど館」の経営が順調だったためにその事業収入を充てました。

(4) 助成がどのような役割を果たしたか

貴財団からの助成をいただいて、支援ネットの活動は、次の2つの面で大きく前へ進むことができました。

第1に、資金面で、この時期に事務所整備の予算を頂戴できたことは、支援ネットの活動を、速やかに活発にすることを可能としました。事務所整備の効果は、すでに述べたので繰り返しません。この工事を支援ネットの会費と事業収入だけで実施するとしたら、数年後になったか、あるいは借入金で実施することになり、法人の運営を不安定にさせたことは間違いありません。

第2に、組織運営面で、次の2つの役割を果たしてくれました。

まず、活動の方向を貴財団に評価していただいたことで、自信ができました。支援ネットは、専用の事務所を持ち、そこでホームレス、会員、ボランティアが活動し、さらに地元の方々とも交流できるという活動の方向を、「まちかど館」開設の後で定めていたのですが、なかなか踏み切りがつかずにいました。それは、資金不足だけでなく、「まちかど館」開設の経緯もあって、地元との関係のイ



事務所開きで学生にねぎらいの言葉をかける団体の代表

メージが固まらなかったことも理由の一つです。そこへ、貴財団の助成をいただき、また選考委員であり、法人設立総会で講演をしてくださった中島明子先生が再度訪問して助言と感想を述べてくださり、この活動方針で進むことの迷いが晴れました。

次に、助成金の使用にあたって、新潟大学との具体的な関係を築くことができました。支援ネットは、設立の時点から、監事に新潟大学経済学部教授を得るなど、新潟大学と関係を持っていました。しかし、それはまだ名目上のものに留まっていたところ、貴財団の助成をいただいたおかげで、若手教員や大学院・学部の学生がボランティアで参加してくださるという、実質的・具体的な関係を形成することができました。

(5) その他団体の視点から成果と思われること

(1) から (4) に記したことに尽きています。

4 活動資金

(1) 助成活動における活動資金のうち、助成金以外の財源の内訳とその割合

3(1) で述べた事業には、別様式で報告した会計金額のほかに、事務所備品としてパソコン・プリンター、電話・FAX、シュレッダー等の購入を要し、その金額が約370,000円で経費総額は1,210,088円となりました。

助成金以外の割合は約34%で、その金額には「ま

ちかど館」住宅部分の家賃収入を充当しました。

(2) 助成期間終了後の活動資金確保の見通しとその方策

助成金を用いて整備した事務所の維持に必要な資金は、「まちかど館」住宅部分の賃料収入によって調達することができます。

他の活動については、すでに取り組んでいる事業については、おおむねその事業の枠内で採算を取るように、事業枠組みを作っています。また新規事業に

取り組む際には、従来どおり、「まちかど館」住宅部分からの賃料収入を中心とした支援ネットの独自の資金と、官民の活動助成金を得て初期投資額を確保するつもりです。

活動が定着し、マスコミに良い意味で登場する機会が増えるに伴い、会員増加や寄付収入を得る方向も探さなくていけないとは思っているのですが、事務局長ひ

とりではなかなか手が回らないのが実情です。この点について詳しくは、次の5(1)で述べます。

5 課題

(1) 団体や活動の抱える課題と解決方策

支援ネットが今直面している問題は、人材と資金です。

人材については、常勤のスタッフは事務局長一人で、企画立案・総務・個々の事業の準備を取り仕切っており、事業の拡大や新規事業の取組みまで手が回



整備されたまちかど館内の事務所



事務所前に貼ってあるまちの案内図を見る人

りかねています。ボランティアのスタッフは数人いるのですが、有職者は仕事の都合で、無職の者も途中で就職したりして、定期的に活動に携わってもらうことは困難です。

これを解決するには、有給スタッフを雇うことが必要ですが、現状の財政では、常勤事務局長にも費用弁償程度しか行えず、新たな被用者を抱えることは困難です。財政規模を拡大すること、とりわけ内部の人件費に使える収入を増やすためには、事業拡大あるいは新規事業に取り組むか、寄付金の収集に取り組むことが必要ですが、そのためには専門のスタッフが不可欠で、この堂々巡りから脱することが課題です。

このほか、「まちかど館」開設の後、入居者の相手をするに時間を割き、また活動の場所を「まちかど館」に集中させてきたために、ホームレスと直接に接して彼らの実情を把握する時間が減っていることも問題です。この問題に対しては、市内のホームレスの実態調査を計画しています。新潟市も2003年の厚労省のホームレス全国一斉調査の一環として行って以来、調査を実施していないので、支援ネットの活動を再検討するのに役立つのみならず、市のホームレスの自立支援施策の策定・遂行にも有用だと考えています。

6 今後の展望

(1) 団体や活動の将来像(今後の展開として検討・予定している内容や目標等)

支援ネットの活動は、「まちかど館」運営が中心になっているので、それを軸に将来像を整理したいと思います。

まず、「まちかど館」の運営自体は、空室が発生することなく順調に推移しています。入居者の生活も、多少の波風や人による差異はあるものの、入居直後に比べれば、全員落ち着いてきました。短期の職を

繰り返す人も数人おり、また「まちかど館」から市営住宅に転居することのできた人もいます。

しかし、入居者は僅か8人で、市内のホームレスの1割程度に過ぎません。

そこで、「まちかど館」2号館の開設がひとつの解決策となりえます。しかし、現在、新潟市内にはホームレスにアパートを提供する非営利組織が、ホームレス支援ネットの他にもう1団体あるので、ホームレスへのアパートの提供はその団体に任せて、ホームレス支援ネットとしては、この方向にそれほど力を入れなくても良いと考えることもできます。この点は、まだ結論を出せていません。

次に、ホームレス・元ホームレスの人たちが、社会生活を行ってゆくための要望を理解し、それに応えるために、「まちかど館」運営の経験から得られた成果を生かしたいと考えています。「まちかど館」の運営を通じて入居者の行動を観察した結果、ホームレスの人たちが生活を安定させるには、家族との繋がりがもっともたいせつであることがわかりました。また、ホームレスの人たちは、いっばんに社会関係を結ぶことが不得手であるものの、比較的対等な人間関係を結ぶことを望むこともわかりました。元ホームレスの人たちは、給与、生活保護、年金等の収入を得られると、それを目当てに近寄ると思われる友人を避けがちになることが明らかです。

そこで、職の提供、求職支援では、従来から行っている清掃等を支援ネットで請負い、ホームレスの人たちへ下請けする事業だけでなく、ホームレス・元ホームレスの人たちがある程度自分のリズムでできるような仕事、例えば農作業に従事することを支援ネットの事業にできないか検討しています。

さらに、仕事の提供に加えて、ホームレス・元ホームレスへの情報教育を試行しています。これは、ホームレス・元ホームレスが、Eメールを使えるようになると、家族や友人と、時間と距離の制約なく意



まちかど館の庭の整備をする入居者



整備後の庭に花が咲いた様子

思の疎通ができるようになるのではないかと思います、彼らにコンピューターの初歩の知識・技能・マナーを教えようというものです。ホームレス・元ホームレスの中には、兄弟がいる者はもちろん、子供や孫がいる者も多いので、Eメールを使うと、時間や距離に関わらないだけでなく、面と向かうという負担感を互いに減らしつつ、歳下の世代とやりとりできるようになるのではないかと期待しています。この事業については、支援ネットには、事業を実施できる人材がないので、新潟市内で高齢者向け情報教育を実施しているNPO法人新潟西地区高齢者パソコン友の会の協力を得るべく交渉しています。

2年半前にホームレスの就労支援を通じた自立支援を目的として設立した支援ネットですが、当初の目的を忘れることなく、しかし「仕事をする」との目的は「落ち着いた社会生活を送る」ことの一部であることから、ホームレス・元ホームレスの人たちが「仕事」の回りで必要としていることを少しずつ埋めてゆきたいと考えています。



共同食堂で入居者とボランティアの懇親会の様子